



TITLE:

フッサールの他者論と倫理学の架橋(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

鈴木, 崇志

CITATION:

鈴木, 崇志. フッサールの他者論と倫理学の架橋. 京都大学, 2018, 博士 (文学)

ISSUE DATE:

2018-11-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21406>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	鈴木 崇 志
論文題目	フッサールの他者論と倫理学の架橋		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、表題の通り、ドイツの現象学者エドムント・フッサール（1859-1938）の他者論と倫理学を関連づけることを最終目的としている。以下、本論の要旨を各部・各章ごとに記す。</p> <p>第1部 フッサールの他者論と倫理学の断絶の原因</p> <p>第1部においては、少なくともある時期までは完全に没交渉であったフッサールの他者論と倫理学が、それぞれ「倫理学なき他者論」と「他者論なき倫理学」と名づけられた。そして筆者は、以下の考察の手引きとして、「フッサールの倫理学と他者論の断絶の原因は、『論理学研究』において彼が伝達的表現を度外視し、独白的表現だけに注目したことにある」という仮説を立てた。そこで、この第1部をなす三つの章においては、『論理学研究』、およびその第1版の書き換え以前に構想された他者論と倫理学に関するテキストの読解を通じて、この仮説の妥当性が検討された。</p> <p>第1章 『論理学研究』第1版における「独白」概念</p> <p>まず第1章では、『論理学研究』第1版（1900/01年）における「独白」概念の役割を明らかにすることが試みられた。同書のプログラムは、大まかに言えば、論理学の諸概念が認識される仕方を、意味付与作用（表現に意味を付与し、その意味を介して対象を志向する作用）に即して説明することである。そしてフッサールは、この意味付与作用を際立たせるために、それに関わらない言語の機能（告知機能）と、それに関わらない性質の作用（非客観化作用）を考察の対象から外している。このとき捨象される告知（Kundgabe）とは、言語表現の送り手が受け手に自らの体験を知らせるといいう機能である。また非客観化作用とは、独自の客観（対象）をもつ表象や知覚や判断に基づけられた作用であり、具体的には、願望、疑問、命令などの作用である。これらの告知機能と非客観化作用は、意味付与作用に関わらないという点で消極的な特徴を共有するのみならず、伝達の成立のために必要であるという点で、積極的な特徴を共有している。よって、それらを遮断して専ら意味付与作用だけを遂行する者は、他者への伝達を行っていないという意味で「独白」を行う者なのである。</p> <p>ところで、告知機能と非客観化作用を度外視することは、『論理学研究』のプログラムに沿って考えれば、確かに妥当である。しかし、こうした制限が同時期の倫理学と他者論にも課せられているとすれば、それは不当な制限になってしまうかもしれない。こうした懸念のもとで、以下では『論理学研究』第1版の書き換え以前の倫理学と他者論の内容が吟味された。</p>			

第2章 『論理学研究』の書き換え以前の倫理学の構想

そこで第2章は、フッサールがゲッティンゲン大学で行った一連の倫理学講義（1908/09、1911、1914年）に即して、この時期の倫理学の構想を概観した。それらの講義において提示されるのは、形式的価値論と形式的実践論を基盤としつつ、個人のなすべき行為を「達成可能なもののうちで最善を行え」という定言命法によって導くような倫理学である。確かにそこでは、『論理学研究』において度外視された非客観化作用が、価値判断や当為判断を基づけるという役割に関して考慮されるようになっていく。しかし、非客観化作用が伝達の場合で果たす役割については、ここでもやはり顧みられないままである。そしてそれゆえに、この倫理学は、伝達の場合で他者から課せられる当為を考慮していないかぎりにおいて、「他者論なき倫理学」ととどまる。

第3章 『論理学研究』の書き換え以前の他者論の構想

次に第3章は、ブレンターノ学派（特にブレンターノ、マルティ、フッサール）における「告知」の概念史研究を行った上で、フッサールの「告知」概念が、『論理学研究』第1版以降に他者論の中に組み込まれた過程を追跡した。確かにそこでは、『論理学研究』では度外視されていた「告知」と、それを受け取るはたらきとしての「告知の受容（Kundnahme）」が考慮されるようになっていく。特筆すべきは、1905年以降にTh・リップスから借用された「感情移入（Einfühlung）」という概念が、当初は「告知の受容」という概念とほぼ同じ外延をもつとされていたことである。しかし1910/11年に行われた「現象学の根本問題」講義では、純粹意識における「自然」の構成という超越論的現象学の問題に取り組む過程で、専ら他者の身体についての経験だけに焦点が当てられることになる。このとき「感情移入」は、そのような身体的な他者経験を指す語に限定される。他方でフッサールは、同講義の中で具体的な超越論的主観を「モナド」と呼び、モナド間の関係についての学として、独自のモナドロジーを展開している。すると、いわゆる彼の他者論は、この時期においては、モナドロジーと感情移入論からなるものとして構想されているのである。こうして、本来ならば伝達の場合での諸経験を包括する広い射程をもつはずの他者経験は、他者の身体についての経験にまで狭められる。すると、自我の側からの能動的な実践や、他者から自我に課せられる当為について論じる余地はなくなってしまう。それゆえこのような制限を課せられた他者論は、さしあたり「倫理学なき他者論」ととどまる。

こうして第1部（第1～第3章）においては、冒頭で立てた仮説の正しさが裏づけられることによって、以下のことが明らかになった。すなわち、『論理学研究』において度外視された「非客観化作用」と「告知」は、部分的には同時期の倫理学と他者論で考慮されるようになっていくものの、伝達の場合でのそれらの役割は捨象されたままである。そして、伝達における自他関係を扱うことができないがゆえに、この時期の倫理学と他者論の間には断絶が生じてしまっているのである。

第2部 フッサールの他者論の展開とその到達点

そこで本論文の第2部においては、第1部の成果を利用しつつ、『論理学研究』書き換え以後のフッサールの他者論の展開を辿ることによって、倫理学への突破口を開くことが試みられた。第3章において示されたように、『論理学研究』書き換え以前の他者論は、さしあたりは「倫理学なき他者論」である。そしてフッサールにとって不幸であったのは、彼の生前に公刊された『デカルト的省察』（1931年）の第5省察が、同じようにモナドロジーと感情移入論から成る他者論に終始してしまったことである。しかし実際には、1930年代のフッサールは、すでに感情移入とは別の他者経験について論じるための十分な材料を草稿として準備していた。ただ残念ながら、その内容は第5省察の中では披露されていない。それゆえ彼の他者論は、一見すると、晩年に至るまで「倫理学なき他者論」にとどまっていたかのような印象を与えるものになってしまっている。本論文の第2部（第4～6章）の主眼は、この誤った印象を拭い去ることにあった。つまり本論文は、かつてのフッサールの他者論に課せられていた制限が後年に彼自身によって撤回された過程を文献的に跡づけることによって、これまで隠されたままであった彼の他者論の完成形態を明るみに出そうとしたのである。なお、こうした試みは、B・ヴァルデンフェルスやL・ペローらによって部分的には着手されていた。しかし彼らの研究は、フッサールのテクストに即した具体的な枠組みを提示することができずにいた。これに対して本論文は、2002年と2005年に漸く公刊された草稿集『論理学研究の補巻』（全集XX/1、XX/2巻）を利用し、そこで盛んに言及されている「告知の受容」という概念を手引きとするという方法を採用した。それによって本論文は、これまで明示的に行われることのなかった他者経験の分類を行い、この分類に即して彼の他者論の全体像を描き出そうとしたのである。

第4章 『論理学研究』第6研究Dの再構成

そのためにまず第4章は、伝達における「告知／告知の受容」と「非客観化作用」について論じるための道具立てが、ほかならぬ『論理学研究』の書き換えのための草稿の中に隠れていることを示した。特に同書の第6研究の全面的な書き換えが試みられた時期（1913-14年）には、現象学の根本概念である「志向性」に対して、重要な変更が加えられている。『論理学研究』第1版以来の見解によれば、空虚な志向が充実した志向に移行することは、同じ志向的本質をもった表意的志向と直観的志向の「合致（Deckung）」によって説明される。しかし同書の書き換えのための草稿の中では、そのような合致ではなく、当人あるいは他者が別の作用を遂行することによって充実される志向もあるとされる。そのような特殊な志向の具体例として挙げられるのは、「記号的志向」（当人が記号の意味を理解することによって充実される志向）や、「伝達的志向」（伝達を受け取る過程で充実される志向）や、「実践的志向」（伝達を踏まえて、さらなる実践によって充実される志向）などである。すると、伝達にお

ける告知とその受容は、伝達的志向とその充実の一種として論じることができるようになる。また、非客観化作用（願望や疑問や命令）は、伝達の場合では実践的志向を有しているとされ、それを充実する他者の側での作用（願望を叶えたり、疑問に答えたり、命令に従ったりする作用）との関連で論じられるようになる。こうして『論理学研究』第1版において言語表現への考察に課されていた制限が完全に撤廃されることにより、フッサールの現象学の内部で「伝達」の諸相を論じることが可能になったのである。

第5章 三つの他者経験

そこで第5章では、伝達の場合で行なわれている他者経験が何であることを解明し、それを感情移入と並ぶものとして提示することが試みられた。そのための手がかりとなるのは、前章においてフッサールの現象学の中に本格的に組み込まれた「告知の受容」という概念である。そして本章では、「他者経験」を「告知の受容」として一般的に特徴づけた上でそれを分類するという方法が採られ、まずは「感情移入」という種の他者経験が、非意図的な身体運動あるいはその産物による告知の受容、として定義された。他方で1913年以降の他者論に関する諸草稿に依拠して、伝達の場合で起こりうる他者経験は、伝達の意図（何かを伝達したいという意図）の告知の受容と、任意の伝達的表現による告知の受容に分けられた。そしてフッサール自身の語法にならって、前者が「語りかけの受容（Aufnahme der Anrede）」、後者が「思考移入

（Einverstehen）」と名づけられた。また本章は、1921年前後の「大きな体系的著作」に関連する草稿の読解を通じて、これらの他者経験を共同体の分類に即して整理し、より具体的に特徴づけていった。こうして本章においては、フッサールの他者経験の理論が、「感情移入」の理論にとどまるものではなく、さらに「語りかけの受容」の理論と「思考移入」の理論を加えた三部門からなるものとして拡張されたのである。

第6章 フッサールの他者経験の理論の到達点

つづく第6章においては、『デカルト的省察』（1931年）前後のフッサールの他者論が主題となった。同書は、フッサールが生前に公刊した著作の中で、他者論に関するまとまった論述を行っている唯一のものである。ただし上述のように、同書で主題となった他者経験は専ら感情移入であった。しかし同書で示唆されているように、感情移入は他者経験の「最初で最低の段階」とであるという点では重要であるが、同書で構想された「超越論的な他者経験の理論」は、それだけにとどまるものではなかったはずである。そこで本章は、前章で行われた他者経験の分類を手引きとして、フッサールの晩年の他者論の中で示唆されている「思考移入」と「語りかけの受容」に関する論述を読み解き、彼の他者経験の理論の到達点が何であったかを考察した。そしてこれによって明らかになったのは、1932年に執筆された「伝達の共同体の現象学」とい

う草稿において、「感情移入の共同体」から「伝達の共同体」への移行の過程が丹念に記述され、特にこの移行を可能にする「語りかけの受容」という種の他者経験が重視されているということである。感情移入の共同体において、私は自分とは異なる「他の自我 (alter ego)」が存在していることを知ることができる。しかし「他の自我」が伝達のパートナーとしての「君 (Du)」でもありうることを知るためには、感情移入とは異なる別種の他者経験が必要である。同草稿によれば、それこそが伝達の相手としての他者からの語りかけを一たとえそこでの語りの意味を理解できないとしても―「傾聴する (zuhören)」という作用であり、それこそが「語りかけの受容」であるとされる。こうしてフッサールの他者経験は、晩年に至って、伝達の共同体という社会の起源に関する「語りかけの受容」の理論に帰着したのである。そしてそこにおいては、「語りかけの受容」という作用は、「応答」という対他的な実践として具体的に説明されることになる。

こうして第2部においては、『論理学研究』の改版プログラムの再構成を手がかりとしてフッサールの他者経験の理論が拡張され、その到達点が「語りかけの受容」の理論であることが明らかになった。

結論 語りかけの受容の理論を介したフッサールの他者論と倫理学の架橋

以上を踏まえて、結論部では、上述の「語りかけの受容」の理論を立脚点として、彼の他者論を倫理学へと接続することが試みられた。具体的には、この接続は (1) 語りかけの受容における当為と実践についての考察、(2) 語りかけの受容の理論によるフライブルク時代のフッサールの倫理学の補完、(3) L・テンゲイの「基礎倫理学」と語りかけの受容の理論の対比、(4) 超越論的現象学の一部門としての語りかけの受容の理論の意義の解明、という四つの観点から行われた。こうして結論部においては、フッサールの他者論の一部門である「語りかけの受容」の理論に対する多面的な考察を通じて、それがフッサール自身の倫理学、ひいては倫理学一般に対してもつ意義が明らかになった。これによって本論文は、最終目的であったフッサールの他者論と倫理学の架橋を達成したのである。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、現象学の始祖であるE・フッサールの哲学を、その他者論と倫理学を架橋することを通じて再考することを目的としている。フッサールの倫理学は、今世紀になって未公開であった講義録や草稿群が相次いで出版されたこともあって、世界的に研究が進展している領域であるが、本論文はそれに倣すというより、その流れを大きく転換させるだけの内容をもった大作である。本論文の論旨は極めて明快である。それは、『イデーンI』が公開された時点までのフッサールにおいては、「倫理学なき他者論」と「他者論なき倫理学」のみが存在していたが、その後計画された『論理学研究』（以下『論研』）第二版へ向けての改訂作業において、両者を架橋する可能性を秘めた試みが開始されており、ついぞ完成されることはなかったこの書き換えの試みのなかにこそ、これまで顧みられることのなかったフッサール倫理学の新しい姿を見いだすことができるというものである。これはフッサールに触発されつつも、それを批判的に乗り越えようとしてきた多くの傑出した思想家、たとえばレヴィナスやデリダですら気づきえなかった論点であり、彼らが参照しえなかった草稿群を手にすることができたという時代的僥倖を別にしても画期的な業績であるといえる。

第1部では、ある時期までのフッサール現象学において、何故に「倫理学なき他者論」と「他者論なき倫理学」が没交渉のごとくに並存していたのかについてが、膨大なテキスト群を精査した上で検証される。第1章では、公開された『論研』においては、伝達的表現が度外視され、独白的表現のみが考察の対象となっていることに着目し、そうなった理由が、論理学的諸概念の認識論的解明においては、意味付与作用のみが注目され、それとは関わらない告知作用や非客観化作用などの言語の別の機能が考察の対象外となった点に求められる。論者はこれを倫理学という観点から正に問題視する。第2章では、最近公開された同時期の倫理学講義録が俎上に載せられる。ここで論者は、倫理学講義においては、『論研』とは異なり、価値評価という非客観化作用への着目はあるものの、他者への告知という側面は等閑視されたままであると指摘し、倫理学が『論研』における形式論理学とのアナロジーによって考えられているために、現在そして未来という時間軸や伝達の受け手としての他者といった点は十分に考察されておらず、「他者論なき倫理学」にとどまっていると喝破する。第3章では、『論研』書き換え以前のフッサールの「他者論」が問題にされる。一般にフッサールの他者論は「感情移入論」として知られており、後年の批判もこの点に集中している。しかし論者は、リップスに由来するこの概念が、フッサールにおいては当初は「告知の受容」という側面があったということを、様々な草稿群を丹念に読み込むことを通じて明らかにする。さらに論者は、元々は言語学者マルティの批判を受容してコミュニケーション論的にも広い射程をもっていたはずのフッサールの「感情移入」概念が、超越論的現象学の構想のなかでは、純粹意識における自然の「構成」と同様、他者の身体の知覚を基にした他者構成の論へと切り詰められていく過程を鋭く描き出し、それを「倫理学なき他者論」として説得力のある仕方で規定する。

第2部においては、以上で明らかにされた問題点に関して、『論研』の書き換えの試みのなかに、フッサール自身による乗り越えの可能性が探られる。第4章では、『論研』書き換えの草稿のなかに、現象学の根本概念である「志向性」概念の重要な変更がみられることを発見し、これが学問論として構想された既刊の『論研』におけるものとは異なる「伝達的志向」や「実践的志向」といった倫理学に関わるものであることが示された。第5章においては、従来フッサール現象学における他者論の到達点とされてきた「感情移入」論に基づく他者論とはまた別の他者論が、『論研』書き換え草稿、ならびに遺稿集『間主観性の現象学』全三巻に収められた草稿群のなかにあることが解明され、そこに「伝達の共同体」論といった倫理学の基礎理論たりうる議論が胚胎しているということが鮮やかに描き出される。この、身体の知覚を基にした「感情移入」だけではなく、伝達の場合における「語りかけの受容」と「思考移入」といった諸概念が他者論において重要な役割を果たすという指摘は、正鵠を射ており、説得力に富む。結論章においては、「語りかけの受容」の理論を立脚点として、フッサールの他者論を倫理学へと架橋する試みが行われる。まず「語りかけ」ということが倫理学の根本概念である対他的「当為」と関係づけられ、ついでこれに基づいてフッサールの倫理学講義における議論が「語りかけの受容」の理論を用いて論者自身の手によって補完、修正される。さらに、自他の基礎関係の解明を軸としてフッサール倫理学を乗り越えようとしたテンゲイの「基礎倫理学」の構想と論者自身の構想の同一性と差異が丁寧に分析される。問題意識としては、本論文はヴッパタール大学留学中の師であったテンゲイの衣鉢を継ぐものであるといえるが、本論文の独自性は、この基礎関係を、あくまでフッサールの超越論的現象学の発展史の枠内で批判的に再考し、フッサール倫理学の別の姿、さらには新しい可能性を示した点にある。

このように、本論文は、膨大なテキスト群を縦横無尽に探索した上で、これまではなかった新しいフッサール像を生き生きとかつ精密に描き出しており、その独創性において比類のないものとなっている。計画中の欧文での出版が実現した暁には、世界の現象学研究の流れを転換させる基本文献となることは疑いをえない。この画期的な業績に、あえて要求するべきものがあるとすれば、学位論文であることを意識したためか、禁欲的にフッサールの文献に内在した堅実な研究に終始しているという点にあると言えるかもしれない。論者は本論文を「倫理学の出発点としての他者論」と位置づけているが、それが最終的にどのような具体的な姿をもった倫理学となるのかは現在の時点では必ずしも定かではない。しかし、すでに開始されている論者のさらなる精進を目にするとき、この課題はむしろ大いなる期待へとつながるものである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成30年7月28日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。